

シンポジウム 記憶の神経心理学

シンポジウム『記憶の神経心理学』にあたって

野上芳美*

第9回日本神経心理学会（昭和60年9月27, 28日, 東京）におけるシンポジウム（座長, 鳥居方策教授）の主題として『記憶』がえらばれた。記憶は, 前世紀後半から現在に至るまでの1世紀あまりにわたって, 心理学, 精神神経科学はもとより, 神経心理学にとっても重要な課題のひとつであった。この期間のうちでも最近30年間の記憶研究の進歩はめざましいものがあった。それは, かつての思弁, 測定, 実験, 症例の観察と剖検といった手法に加えて, 洗練された脳外科学, 電気生理学, 神経化学, さらに分子生物学, 情報論その他の分野からの参加によるものである。その結果として, 記憶に関するわれわれの知識はきわめて豊かとなった一面, 記憶という概念が拡大していることが指摘されている現状である。そこで, 今回のシンポジウムにおいて記憶を主題として取り上げるに当たっては, 神経心理学の枠を越えることなく, 以下の3点に焦点が絞られた。

その第一は測定法についてである。神経心理学においては, 機能検査の方法論とその結果の解釈について論議が尽されていないので, その問題をとりあげたわけである。小谷津孝明氏は『記憶の測定法』において心理学の立場から, 総論的な展望ののち, 測定方法についての概説を行なった。板東充秋氏は健忘症候群の前向健忘の診断法とその問題点につき述べ, これまでの記憶の測定法がかならずしも病態の本質, 病巣部位あるいは laterality を正確に反映させ得ない可能性があることを指摘した。

論点の第二は記憶の局在論の問題である。浅井昌弘氏は『脳の局在損傷と記憶』において記憶の分類と大脳の局在損傷とについての包括的かつ明快な展望を行なった。

第三は失語, 失行, 失認のごとき障害と記憶とのかかわりに関するものである。これらの障害が道具的な記憶の障害であるという素朴な見解はとれないにしても, Warrington らによる伝導失語の復唱障害の短期記憶障害説をめぐる論議は十分な決着がついているとはいいいがたい。また, 失認論の一部も記憶の側面からの検討の余地がある。杉下守弘氏は『視覚失認と記憶』と題して, 連合型視覚失認と相貌失認をとりあげ, それが記憶障害として理解することが可能か否かを, 自験例を参照しながら論じた。相馬芳明氏は『失語と記憶』において, 伝導失語の自験例に系列即時再生課題を与える実験結果から, 伝導失語の復唱障害に関する言語性STMの役割は部分的なものであることを示し, また, 言語性STMの低下は伝導失語に特異的なものではないことを指摘して, 伝導失語の復唱障害の短期記憶障害説に批判的な見解を示した。辰巳格氏らは『失語症例の単語情報の記憶範囲について』と題する講演において, 老年健常者を対照として各種の失語症者について行なった各種刺激のMSの実験結果を, 演者らのSTMモデルにもとづいて検討した結果を述べた。

なお, 一過性全健忘については別にワークショップとして8名の演者から発表がなされ, また, 14題のシンポジウム関連演題の発表があっ

*日本大学医学部精神神経科, Yoshimi Nogami : Department of Neuropsychiatry, Nihon University School of Medicine.

た。

以上の講演はそれぞれ論点を異にしており、それらを総括することはもとより困難である。しかし、少なくとも以下のようなことはいえるであろう。失語、失認のごとき障害を記憶障害に還元しようとするのではなくて、記憶という

側面からそれらに接近し解析することによって記憶の機制に関する理解を深めることが可能である。神経心理学にとって記憶へのアプローチは、なお解明されるべきことの多い興味ある課題であることが確認された。